通巻534号

紅葉坂

教会だより

2013年10月号 No.8
横浜市西区宮崎町1
日本キリスト教団
紅葉坂教会
牧師 岩橋常久
伝道師 川上咲野

説教

「平和のしるし」

岩橋常久

二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。
マルコによる福音書11章7節

年をとること

滝上正

年をとること　それは「死」に近づくことでもある。まず、旅行のことを考えてみる。出かける前の「わくわく感」、目的地に近づくときの「そわそわ感」そして、旅行を終えたあとの「やれやれ感」。そして、「やった」ということでおしまいである。

一方、人生行路、つまり一生の旅路と対比してみる。「死」は目的ではないにしても、終着、ターミナルであることにはまちがいない。神のみもとにかえるのだ。しかし、それが近づいてきても「わくわく感」、そして「そわそわ感」は全くない。ましてや、「やった」という「達成感」を聞いた人は一人もいないはずだ。達成すれば、そこでは、「安らか」に憩う。永遠の命にあずかるはずなのに。

「やった」と言えるターミナル。どういう人がいつ言えるのだろうか？

青春の詩

ウルマン

青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが情熱を失う時に精神はしぼむ。苦悩や、狐疑、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥に帰せしめてしまう。年は七十であろうと十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。曰く「驚異えの愛慕心」空にひらめく星晨、その輝きにも似たる事物や思想の対する欽迎、事に處する剛毅な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探究心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く　疑惑と共に老ゆる
人は自信と共に若く　恐怖と共に老ゆる
希望ある限り若く　失望と共に老い朽ちる

大地より、神より、人より、美と喜悦、勇気と壮大、偉力と霊感を受ける限り人の若さは失われない。これらの霊感が絶え、悲歎の白雪が人の心の奥までも蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを固くとざすに至ればこの時にこそ人は全くに老いて神の憐れみを乞う他はなくなる。

空が変った

星野富弘

毎日空を見ていた
空が変わった
涙を流し友が祈ってくれた
あの頃
恐る恐る開いた
マタイの福音書
あの時から
空が変わった
空が私を
見つめるようになった

ろばが登場する。馬に較べて、力はない、早く走れない。しかし聖書では、ろばは神に用いられている。民数記22章21節～30節には預言者に向かって神の言葉を語るろばが出てくる。力がなく、早く走れないろばが神の使いとして語っている。イエスは、エルサレムに入るのに、馬ではなく、ろばに乗られる。それは、ゼカリヤ書9章の預言の成就として描かれている。ゼカリヤ書では、王は高ぶることなく、しかし勝利の王としてろばに乗ってやってくると言われている。勝利の王は、10節以下を読むと、平和をもたらす王である。ろばは平和のしるし。力がない、早く走れないろばは平和のしるし。平和は、消極的には戦争のない状態をさす。では、平和は積極的にはどんな状態なのか。力はなく、早く走れないろばのイメージから連想すると、子どもと高齢者が喜べる状態。子どもと高齢者は平和のしるし。しかし、子どもと高齢者が平和のしるしと見られるには、社会の価値観を変える必要がある。

力がない、早く走れないことは、私たちの一般的な価値観では、価値が認められない状態。このような変化を求める動機づけも弱い。大体、私たちは、力がない、早く走れない状態になりたいか。ろばのようになりたいか、自分に問うてみたら、だれもそうは思わないだろう。だれも年はとりたくない。「わくわく感」も「そわそわ感」（滝上正さん）もなくて当然だろう。それでも、なんとか若い時の気概を持とうとする。ウルマンの「青春の詩」では、「信念」さえ、気概という自分の能力の一つとしている印象を受ける。これに対して、星野富弘さんの詩は、力がない、速く走るどころか自分で歩けない状態になった人の詩。「空を見る」という能動的な姿勢から、「空に見られている」という意識への転換がある。見るということは、自分に力がある。自分が早いということと同列にある。しかし、「見られている」は力のない、早く走れない自分に注がれたまなざし、関心、そして愛を意識している。「見られている」には私たちの究極的な意識があるように思える。結局、年をとった状態は、見られる状態なのだ。私たちは、その見られているのも意識できないほどに年をとるかもしれない。そのとき私たちは空を見ない、見ていることを意識しない。けれども、空が見ていることは変わりない。その空は、実は、神である。神が私たちを見ているというのは、実はいまの私たちに与えられている神の約束。いまは、その約束のなかを生きていることができる自由をもっている。星野富弘さんのように。